

Ⅱ-2 中間アウトカム関連の集計・分析

1. 交際状況と出会いの機会

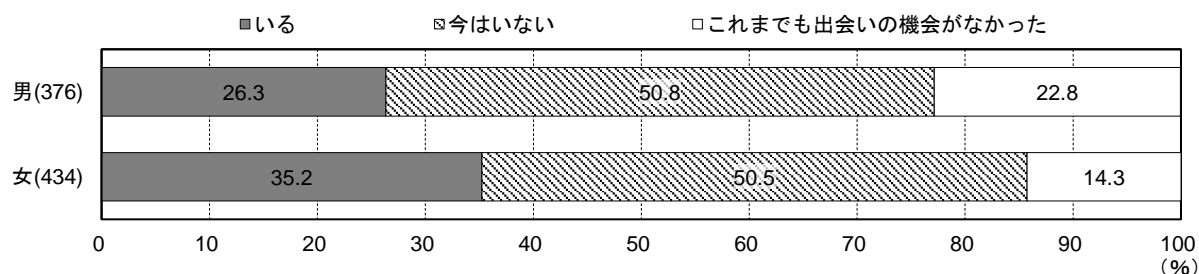
(1) 交際状況

(交際状況は地域により違いがみられる)

交際状況は未婚者の結婚意欲や結婚希望の実現に強い影響を与えていた。調査では、現在、交際相手が「いる」は男性 26%、女性 35%であり、女性の方が多いため(図Ⅱ-4 1)。「今はいない」は男女で変わらず、「これまでも出会いの機会がなかった」は男性の方が多いため。

交際状況は、地域で差がみられる(図Ⅱ-4 2)。男女とも、現在、交際している相手が「いる」が、備前、備中、美作の順で多い。「これまでも出会いの機会がなかった」は、男性では備前・備中に比べて美作は約 10 ポイント多く、女性では備前に比べ備中・美作は約 10 ポイント多い。

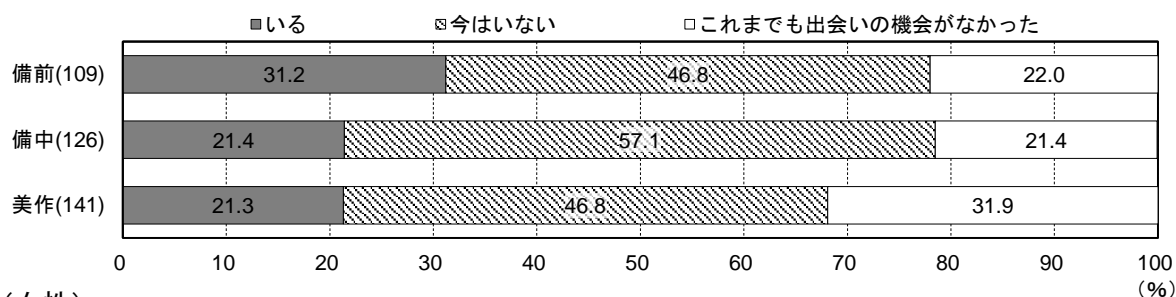
図Ⅱ-4 1 交際状況(未婚者、単数)



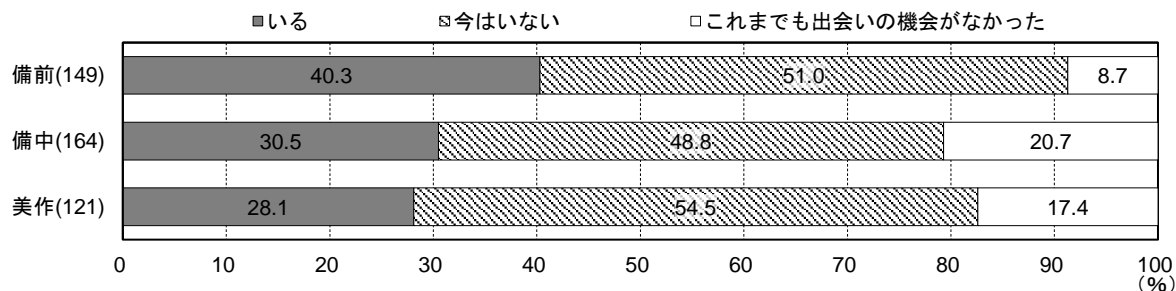
(注) 県民局別男女未婚者人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

図Ⅱ-4 2 地域別にみた交際状況(未婚者、単数)

(男性)



(女性)

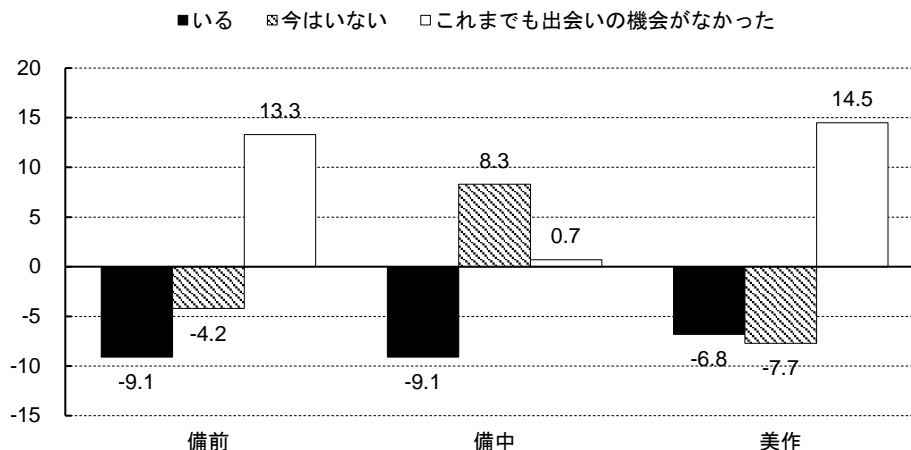


項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1063	0.1151
P値	0.0752	0.0215

(男女の交際状況のずれをみると備前と美作が大きい)

備前は男女とも「これまでに出会いの機会がなかった」が3地域の中で最も少ないが、男女の回答結果の差を「男性－女性」で算出して地域別に比較すると、備前と美作は同程度である(図II-43)。

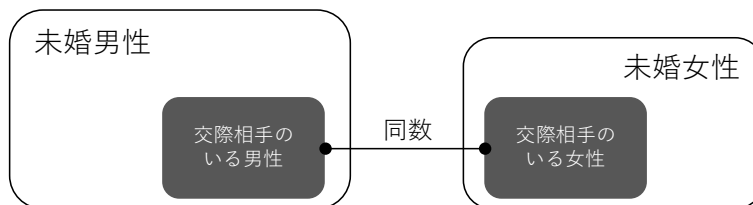
図II-43 県民局別にみた交際状況における男女の回答割合の差(未婚者)



現在、交際相手が「いる」に男女で差が生じる理由の一つは、調査対象となった年齢における未婚者数の男女差が考えられる(図II-44)。一般に結婚を求める年齢階層では女性より男性が多く、人口減少局面で、男性の年齢の方が高いカップルが多いとさらに差が生じる。このため、人口が多い男性の方で交際相手が「いる」割合が低くなると考えられる。

この他、男女による交際状況の認識の差異やアンケートの回収状況の差(交際相手がいる男性の回収率が低い)といったバイアスが要因となっている可能性もある。また、交際相手と出会った機会をみると、女性の方が「SNS等、インターネットを通じて」が多く、県外に交際相手がいる割合が男性より女性に多い可能性も考えられる。

図II-44 未婚者数の男女差が、交際相手が「いる」割合に影響する理由



(2) 出会いの機会

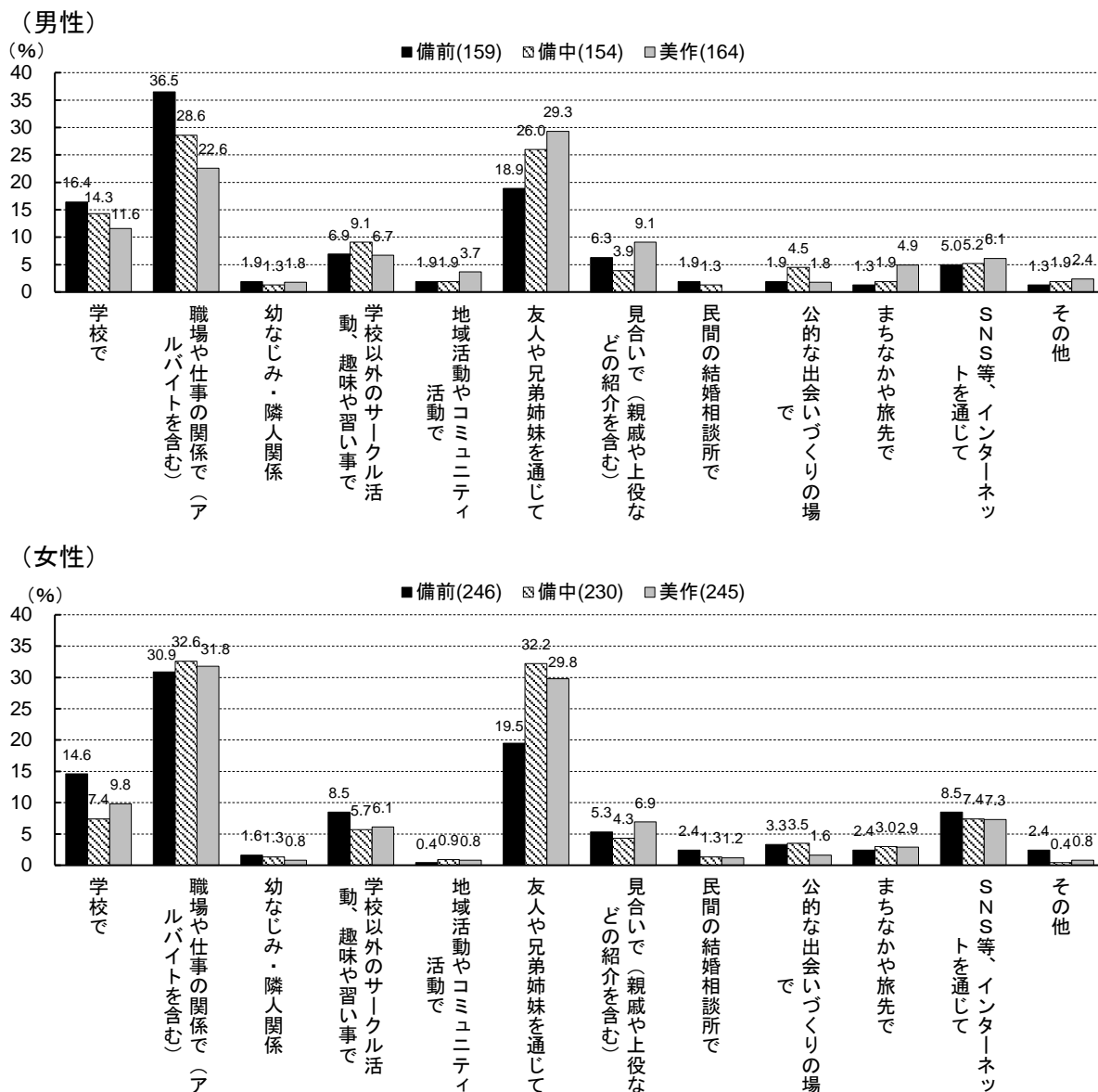
(備前は「職縁」と「学縁」が多い)

出会いがなければ交際は生まれなため、男女の出会いの機会は、交際状況の決定要因の一つである。

交際中の未婚者が相手と出会った機会と既婚者が配偶者と出会った機会を合わせ、県民局別に集計した(図Ⅱ-45)。最も回答が多い「職場や仕事の関係で」(職縁)は備前が37%であるのに対して美作では23%である。「学校で」(学縁)も備前と美作の差が大きい。反対に「友人や兄弟姉妹を通じて」は美作で29%であるが備前では19%である。

この他で、地域で特徴がみられるものは、「学校以外のサークル活動、趣味や習い事で」は備中、「見合いで」は美作が多い。また、「SNS等、インターネットを通じて」がどの地域でも5%を上回っており、注目される。

図Ⅱ-45 県民局別にみた未婚者の交際相手・既婚者の配偶者と出会った機会(単数)



(3) 出会いの機会に影響を及ぼす要因

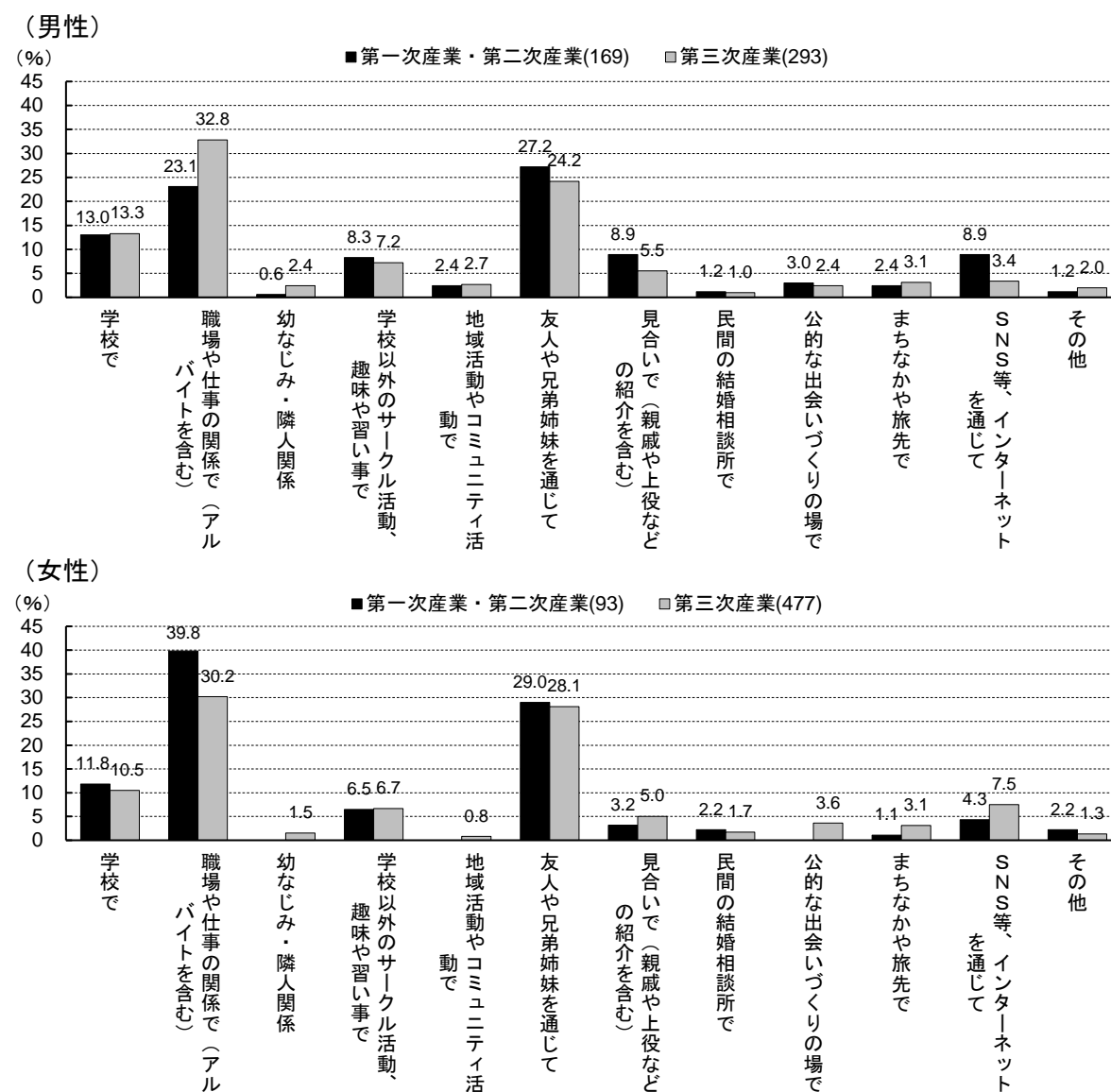
① 職縁の産業による差異

(男女の職縁は産業によって大きな差がある)

現在就業している者を対象に勤め先の産業別に出会った機会をみた(図Ⅱ-46)。その結果、「職縁」に男女や産業で明らかな差異がみられる。

男性は職縁により交際相手・配偶者と出会った者は第一次産業・第二次産業で23%であるのに対して第三次産業では33%に上る。反対に、女性の職縁は、第一次産業・第二次産業は40%、第三次産業30%であり、男性と正反対の結果となった。これらの背景には、産業間の就業者性比の差異があると考えられる。

図Ⅱ-46 勤め先産業別にみた未婚者の交際相手・既婚者の配偶者と出会った機会(単数)



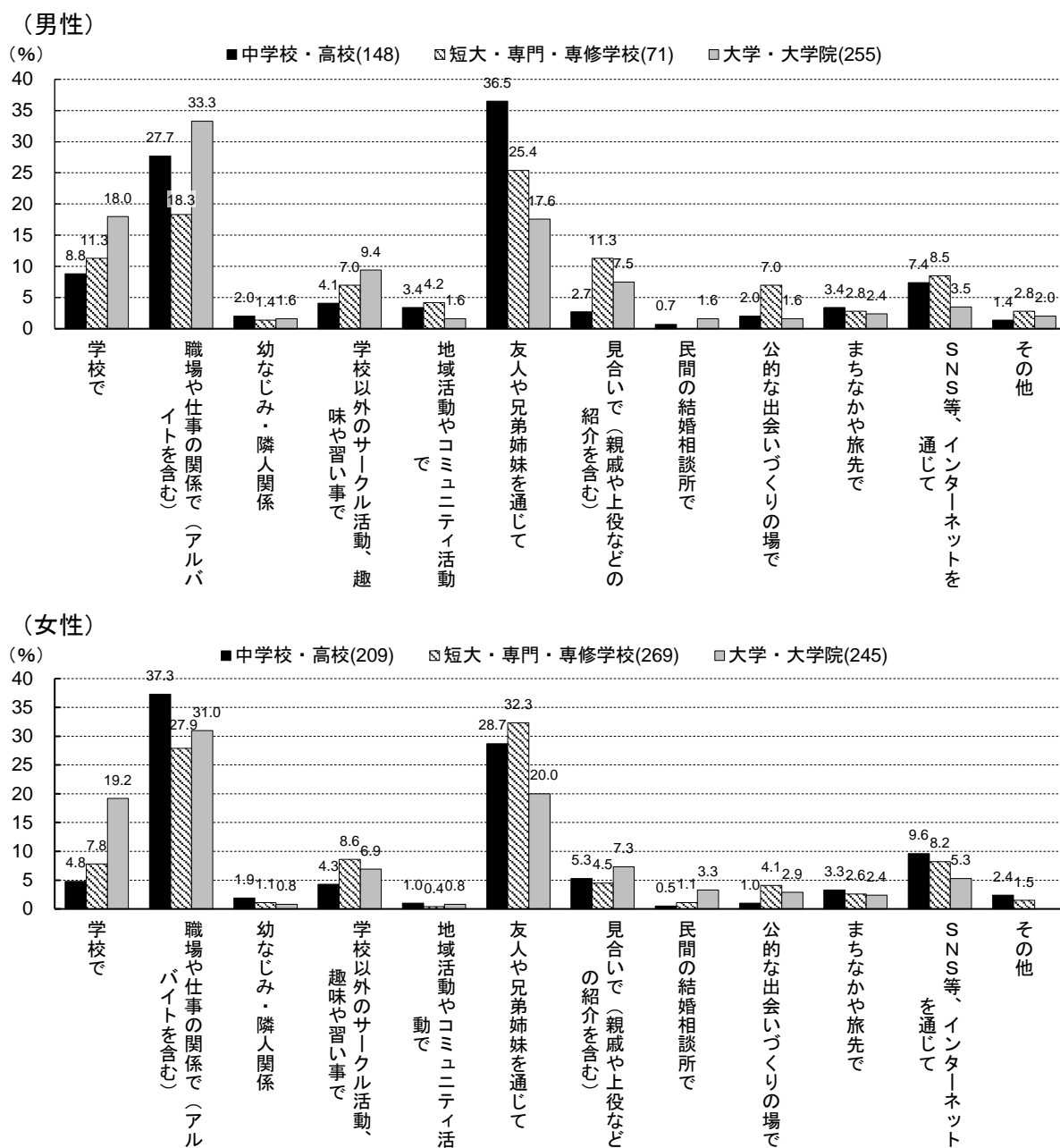
②学縁の学歴による差異

(学縁は学歴により大きな差がある)

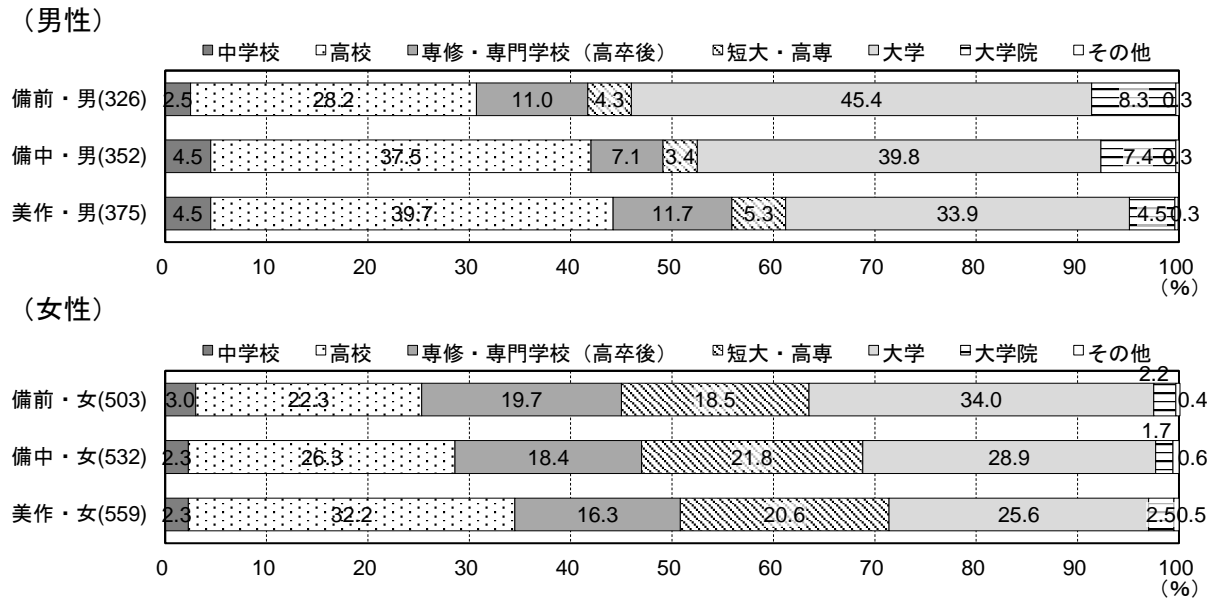
学生であった期間に着目して学歴を三区別して集計すると、男女とも交際相手・配偶者と出会った機会のうち「学校で」において明らかな差異が表れる(図Ⅱ-47)。大学・大学院では、男性の18%、女性の19%は「学校で」が出会った機会になっている。中学校・高校は「友人や兄弟姉妹を通じて」が多く、これを「家族縁・地縁」と表現することも考えられる。

最終学歴は地域別で差がみられる。備前、備中、美作の順で、大学や大学院の割合が大きく、この傾向は男性で顕著である(図Ⅱ-48)。これも産業構造が影響を与えているとみられる。

図Ⅱ-47 最終学歴別にみた未婚者の交際相手・既婚者の配偶者と出会った機会(単数)



図Ⅱ－４８ 地域別にみた最終学歴（単数）



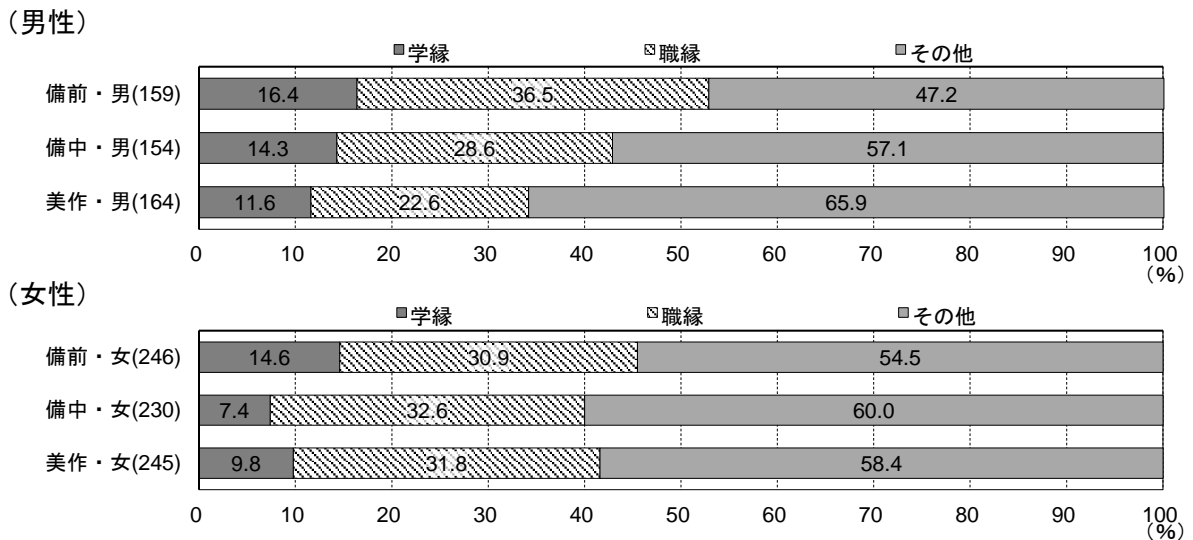
項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1105	0.0814
P値	0.0118	0.0488

(男性の交際状況の地域差は職縁や学縁による差が大きい)

出会った機会を「学縁」「職縁」「その他」の三分区として、地域で比較した(図Ⅱ－４９)。男性では、「学縁」と「職縁」の両方が備前、備中、美作の順で大きい。

一方、女性は「学縁」が備前で多いといった特徴がみられる。学生人口は直接には地域の20歳代前半の出生率を低めるよう働くものの、卒業後の20歳代後半以降に「学縁」で出会った結婚を増やすよう影響していると考えられる。

図Ⅱ－４９ 県民局別にみた出会った機会（三分区）



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1106	0.0691
P値	0.0200	0.1416

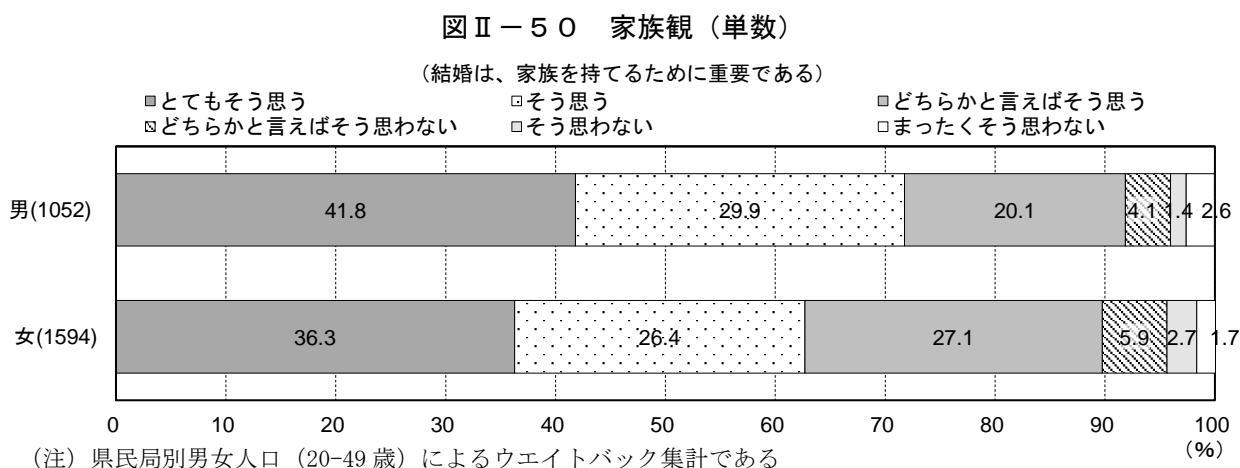
2. 家族観・子ども観

(1) 家族観・子ども観の把握

(家族観を強く肯定する者は約40%)

「結婚は、家族を持てるため重要である」という家族観は、結婚意欲に対して強い影響を及ぼしていた(表Ⅱ-3)。

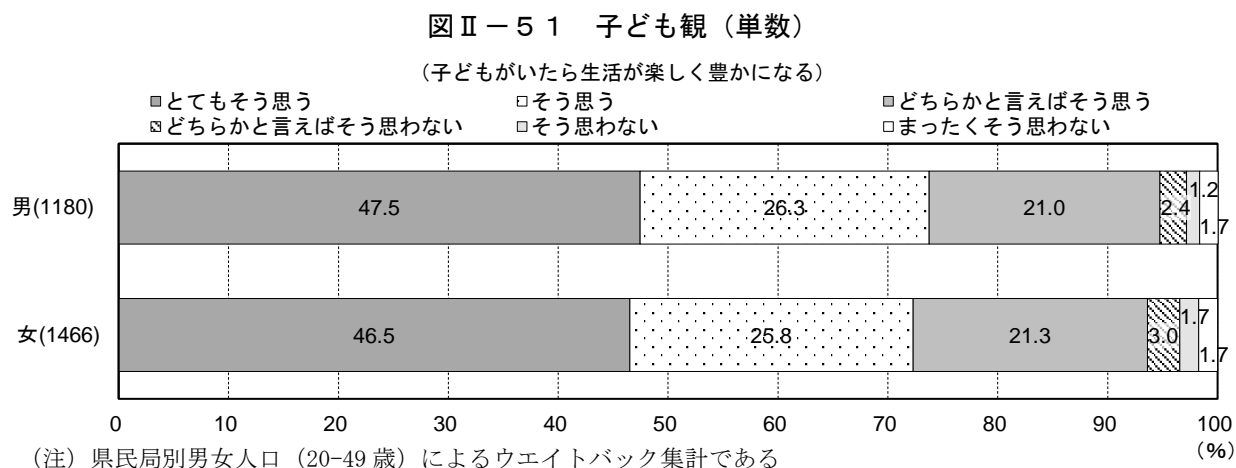
上記の家族観に対して、「とてもそう思う」と強く肯定する者は、男性42%、女性36%である(図Ⅱ-50)。「とてもそう思う」「そう思う」を合計すると男性72%、女性63%であり、男女に9ポイントの差が表れる。家族観は男性でやや肯定的意見が多い。



(子ども観を強く肯定する者は50%弱)

「子どもがいたら生活が楽しく豊かになる」という子ども観は、理想の子ども数に対して強い影響を及ぼしていた(表Ⅱ-19)。

上記の子ども観について「とてもそう思う」と強く肯定する者は、男性48%、女性47%である(図Ⅱ-51)。男女の回答にほとんど差はない。



(2) 家族観・子ども観に影響を及ぼす要因

①社会関係性

本調査では、回答者の暮らしている地域の社会関係性^{*}や社会関係性に対する志向を測定するため、以下の7項目の質問をリッカード形式により行った。

^{*}人々間の信頼関係やつながりの程度を表す「ソーシャル・キャピタル」は「社会関係資本」と訳されることが多いが、本報告書では簡略化して「社会関係性」と言い表す。

- (1) 近所には信頼して相談できる友人・知人がいる
- (2) 伝統行事や町内会活動などが活発である
- (3) スポーツ活動や趣味の活動が活発である
- (4) 地域活動で同年代の人とふれ合う機会が多い
- (5) 自分は近所で挨拶や立ち話をよくする
- (6) 自分は地域活動への参加に積極的である
- (7) 自分は地域の課題に関心がある

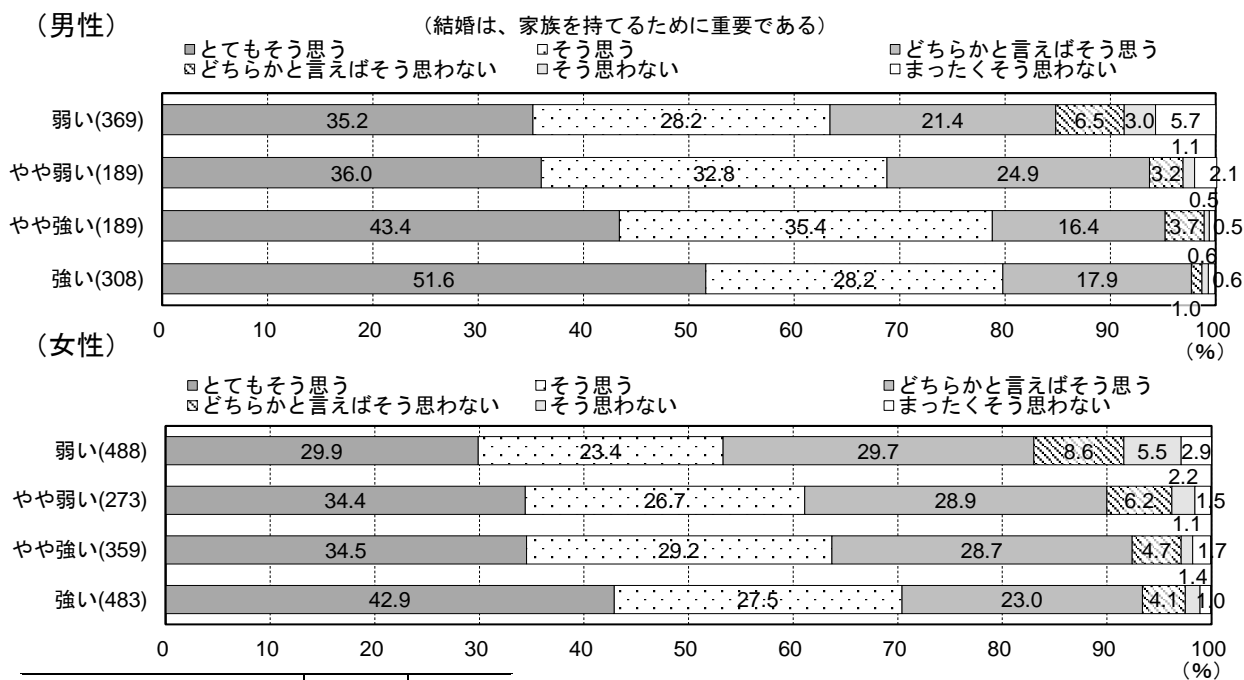
7項目の回答から主成分分析により第一主成分を算出し、指標「社会関係性」を作成した。主成分得点に基づき、「社会関係性」を「弱い」「やや弱い」「やや強い」「強い」の四つに区分した。

i) 家族観

(社会関係性には家族観に強い影響を及ぼす)

4区分した社会関係性の強さ別に家族観を集計すると、男女とも社会関係性が強いほど、家族観が強まる傾向がみられる(図Ⅱ-52)。

図Ⅱ-52 社会関係性の強さ別にみた家族観(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1412	0.1063
P値	0.0000	0.0000

社会関係性が家族観に及ぼす影響の強さは、社会関係性が「強い」と家族観の「積極的肯定(とてもそう思う+そう思う)」の出現率が男性で2.1倍、女性で1.6倍になる(表Ⅱ-27)。

表Ⅱ-27 社会関係性の家族観に対する影響の強さ

(件、%、倍)

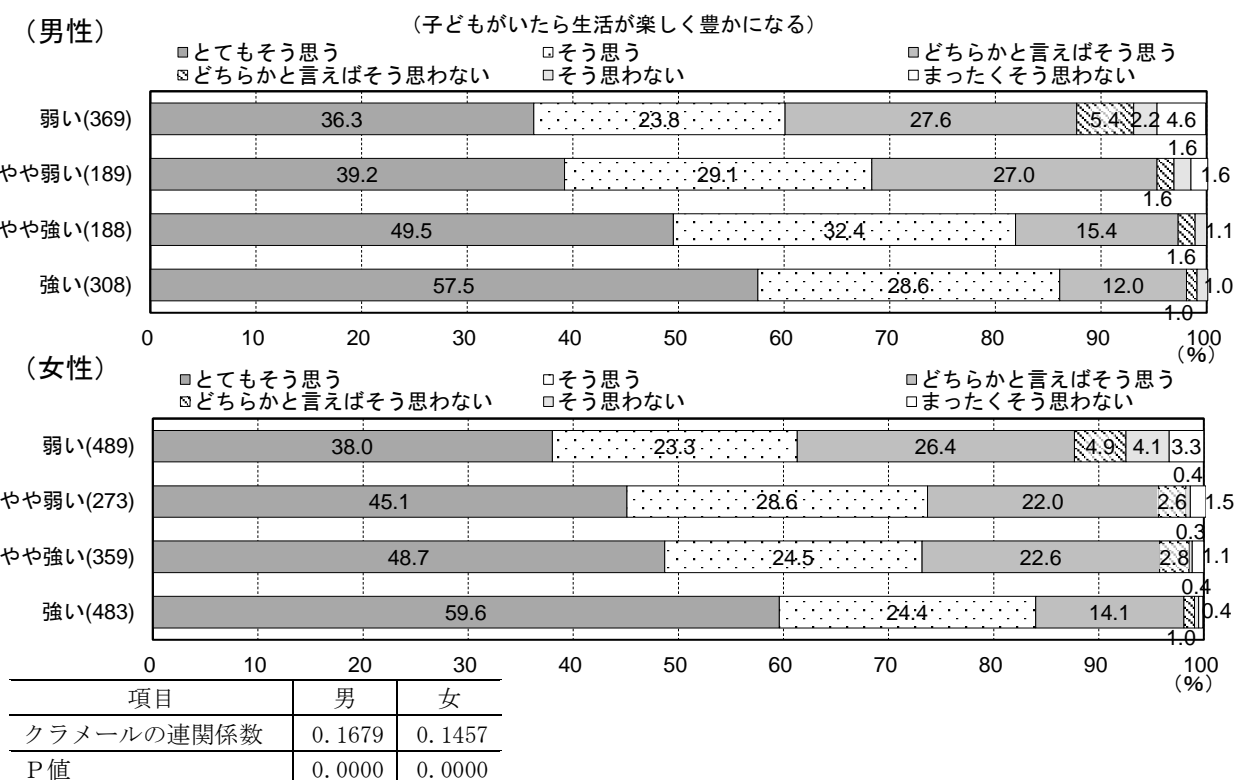
性別	社会関係性・強い			社会関係性・弱い			オッズ比		
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定		消極的肯定・否定	オッズ
男	497	79.5	20.5	3.88	558	65.2	34.8	1.87	2.07
女	842	67.6	32.4	2.09	761	56.1	43.9	1.28	1.63

ii) 子ども観

(社会関係性は子ども観に対してかなり強い影響力を及ぼす)

子ども観も、社会関係性の強いほど男女とも「とてもそう思う」が増加している(図Ⅱ-53)。社会関係性が子ども観に及ぼす影響の強さをみると、社会関係性が「強い」と子ども観の「積極的肯定」の出現率が男性で3.2倍、女性で2.0倍となる(表Ⅱ-28)。

図Ⅱ-53 社会関係性の強さ別にみた子ども観(単数)



表Ⅱ-28 社会関係性の子ども観に対する影響の強さ

(件、%、倍)

性別	社会関係性・強い			社会関係性・弱い			オッズ比		
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定		消極的肯定・否定	オッズ
男	496	84.5	15.5	5.45	558	62.9	37.1	1.70	3.22
女	842	79.5	20.5	3.88	762	65.7	34.3	1.92	2.02

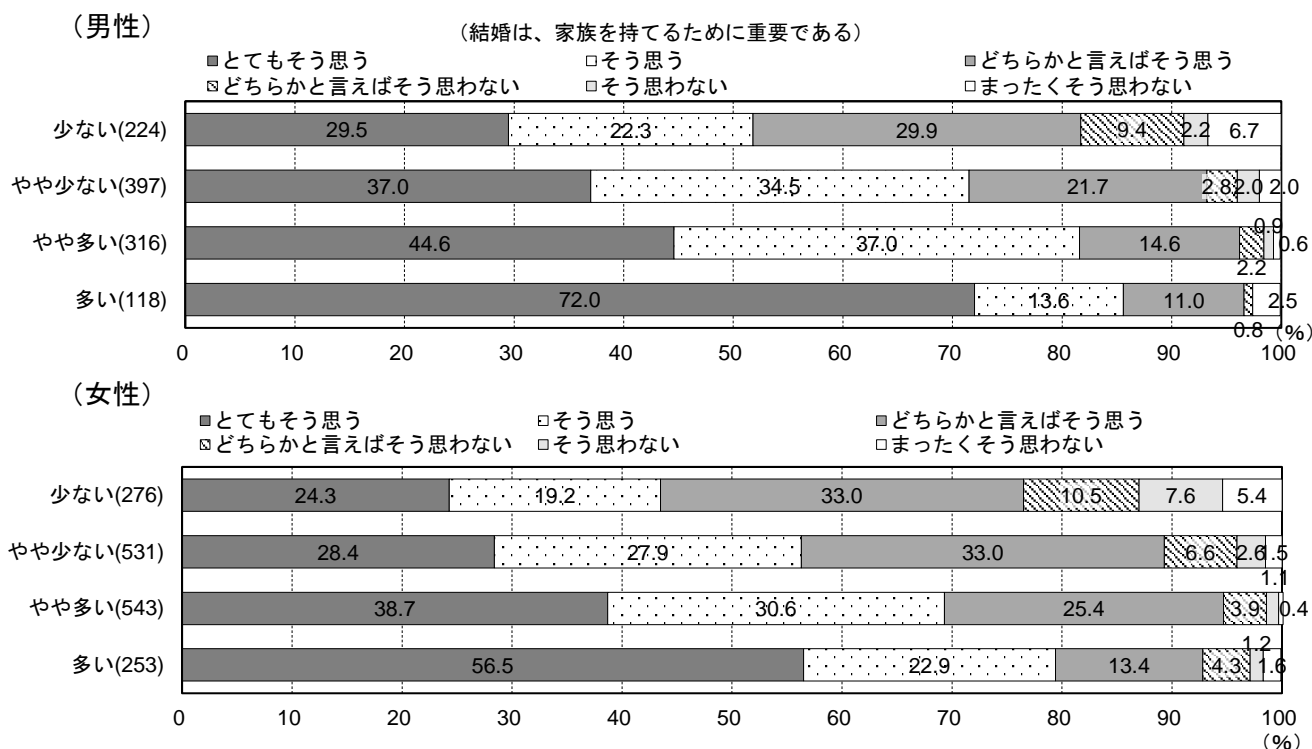
②家族経験・子ども経験

i) 家族観

(家族経験は家族観に対してかなり強い影響力を及ぼす)

「両親や親せきに仲の良い夫婦がいた」「友人に仲の良い夫婦がいた」の二つの質問の回答を主成分分析で合成し、指標「家族経験」を作成した。「家族経験」別に家族観を集計すると、男女とも正の相関が表れる。男性では、「家族経験」が「少ない」では、家族観の「とてもそう思う」が30%であるのに対して「多い」では72%に達する(図Ⅱ-54)。女性も同様の傾向がみられる。

図Ⅱ-54 家族経験別にみた家族観(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2010	0.1833
P値	0.0000	0.0000

「家族経験」を「多い」と「少ない」の二区分とし、「家族経験」が結婚観に及ぼす影響の強さを算出した(表Ⅱ-29)。「家族経験」が「多い」と、「少ない」に対して結婚観に対して「積極的肯定(とてもそう思う+そう思う)」の者の出現率が男性では2.6倍になる。女性では2.4倍であり、男女ともかなり強い影響力がみられる。

表Ⅱ-29 家族経験の家族観に対する影響の強さ

(件、%、倍)

性別	家族経験・多い				家族経験・少ない				オッズ比
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	
男	434	82.7	17.3	4.78	621	64.4	35.6	1.81	2.64
女	796	72.5	27.5	2.64	807	51.9	48.1	1.08	2.44

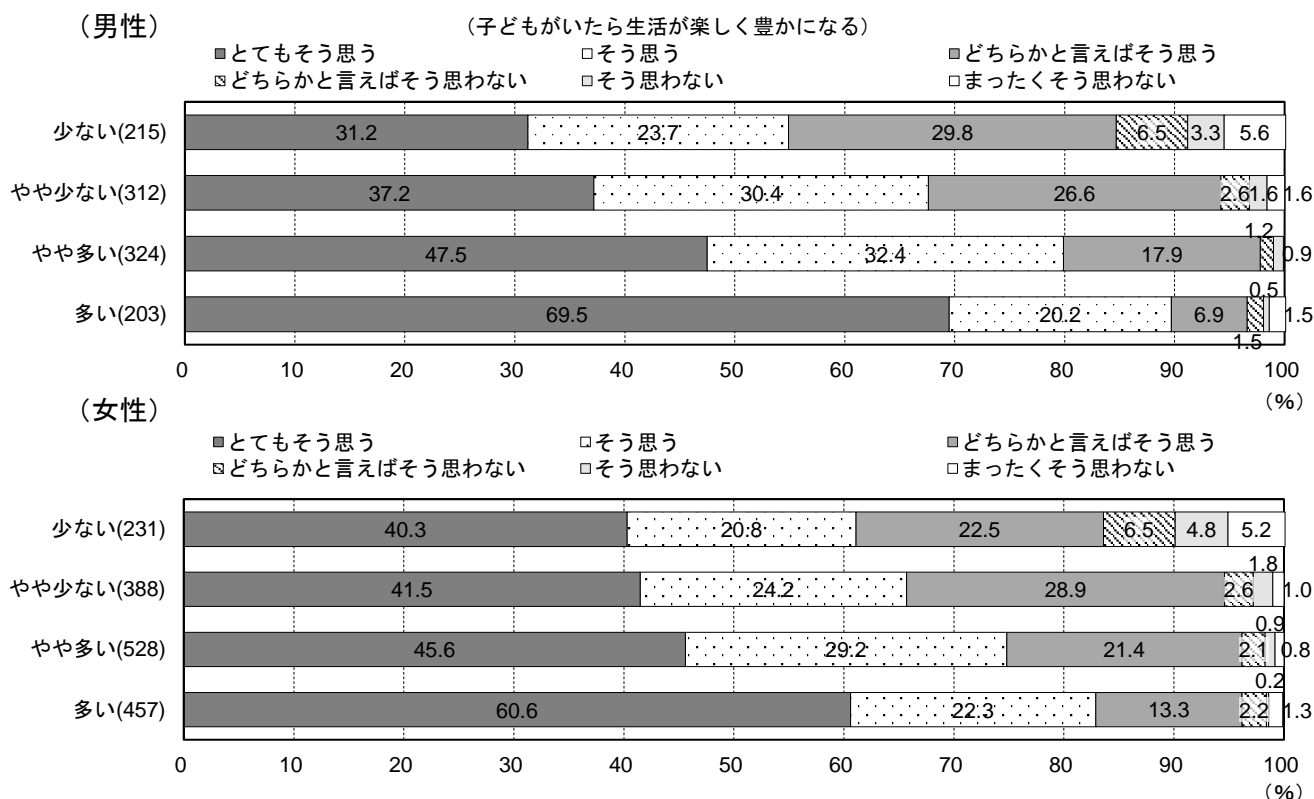
ii) 子ども観

(子ども経験は男性の子ども観に対して極めて強い影響力を及ぼす)

「小さい子どもとふれ合う機会がよくあった」「身近に三人以上子どもを持つ夫婦が多かった」の二つの質問の回答を主成分分析で合成し、指標「子ども経験」を作成した。

「子ども経験」の多さ別に子ども観を集計すると、男女とも正の相関が表れる。特に男性では、「子ども経験」が「少ない」では、子ども観の「とてもそう思う」が31%であるのに対して「多い」では70%に達する(図Ⅱ-55)。女性も同様の傾向がみられるが、男性ほど明確でない。

図Ⅱ-55 子ども経験別にみた子ども観(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1997	0.1513
P値	0.0000	0.0000

「子ども経験」を「多い」と「少ない」の二区分とし、子ども観に及ぼす影響の強さを算出した(表Ⅱ-30)。「子ども経験」が「多い」と、「少ない」に対して子ども観の「積極的肯定」の出現率が男性で3.1倍となり、極めて強い影響力が表れた。女性では2.1倍であった。

表Ⅱ-30 子ども経験の子ども観に対する影響の強さ

性別	子ども経験・多い				子ども経験・少ない				オッズ比
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	
男	527	83.7	16.3	5.13	527	62.4	37.6	1.66	3.09
女	985	78.6	21.4	3.67	619	64.0	36.0	1.78	2.07

3. 家族・子どもに対する感受性

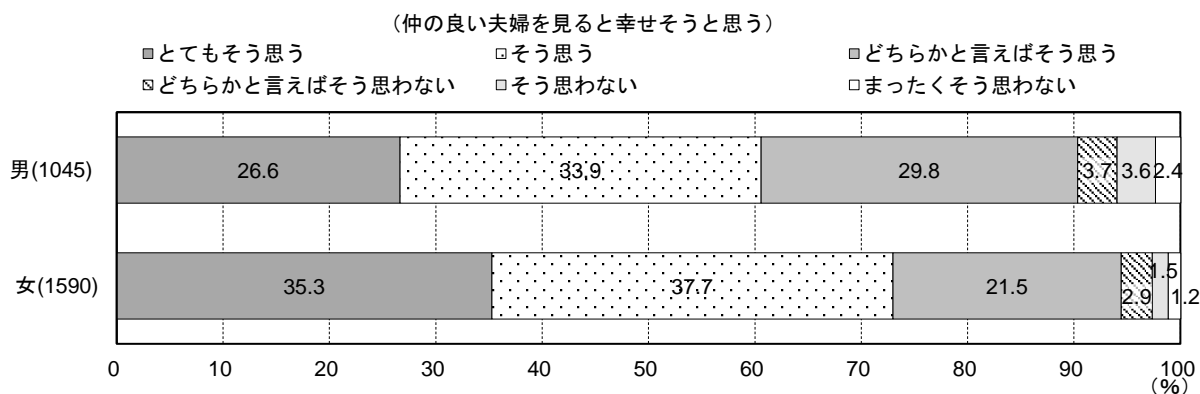
(1) 家族・子どもに対する感受性の把握

(家族に対する感受性を強く持つ者は約 30%)

「仲の良い夫婦を見ると幸せそうと思う」という「家族に対する感受性」は結婚意欲に対して強い影響を及ぼしていた(表Ⅱ-4)。

上記の「家族に対する感受性」について「とてもそう思う」と回答し、「家族に対する感受性」を強く持つ者は男性で27%、女性で35%であった(図Ⅱ-56)。

図Ⅱ-56 家族に対する感受性(単数)



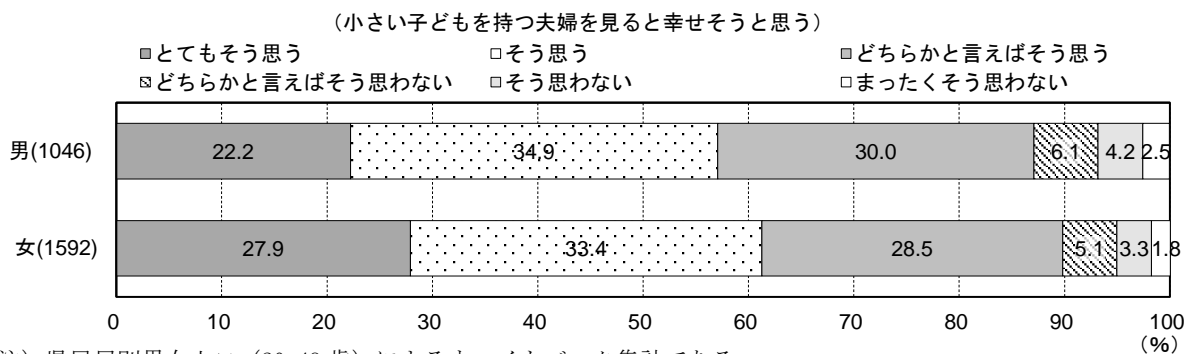
(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウエイトバック集計である

(子どもに対する感受性を強く持つ者は女性に多い)

「小さい子どもを持つ夫婦を見ると幸せそうと思う」という「子どもに対する感受性」は、理想の子ども数に強い影響を及ぼしていた(表Ⅱ-20)。

上記の「子どもに対する感受性」を把握すると「とてもそう思う」と回答し、「子どもに対する感受性」を強く持つ者は、男性で22%、女性で28%であった(図Ⅱ-57)。

図Ⅱ-57 子どもに対する感受性(単数)



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウエイトバック集計である

(2) 家族・子どもに対する感受性に影響を及ぼす要因

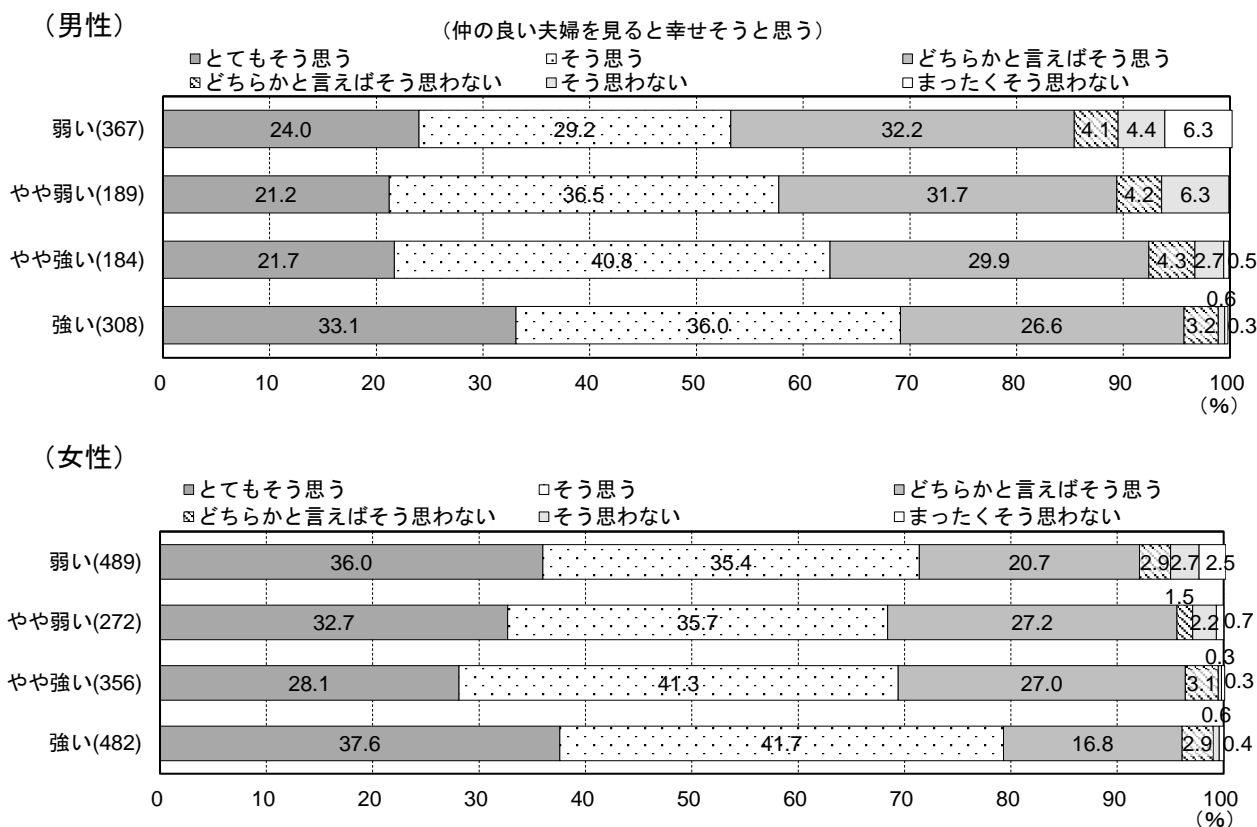
①社会関係性

i) 家族に対する感受性

(社会関係性は男性の家族に対する感受性に強く影響する)

家族に対する感受性も、社会関係性との間に緩やかな関係がみられる(図Ⅱ-58)。社会関係性が家族に対する感受性に及ぼす影響の強さをみると、社会関係性が「強い」と、家族に対する感受性の「積極的肯定(とてもそう思う+そう思う)」の出現率は男性で1.7倍、女性で1.3倍になる(表Ⅱ-31)。女性はもともと男性よりも家族に対する感受性が強い者が多いこともあり、社会関係性は女性より男性の家族に対する感受性に強い影響力を及ぼしている。

図Ⅱ-58 社会関係性の強さ別にみた家族に対する感受性(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1455	0.1024
P値	0.0000	0.0000

表Ⅱ-31 社会関係性の家族に対する感受性への影響の強さ

(件、%、倍)

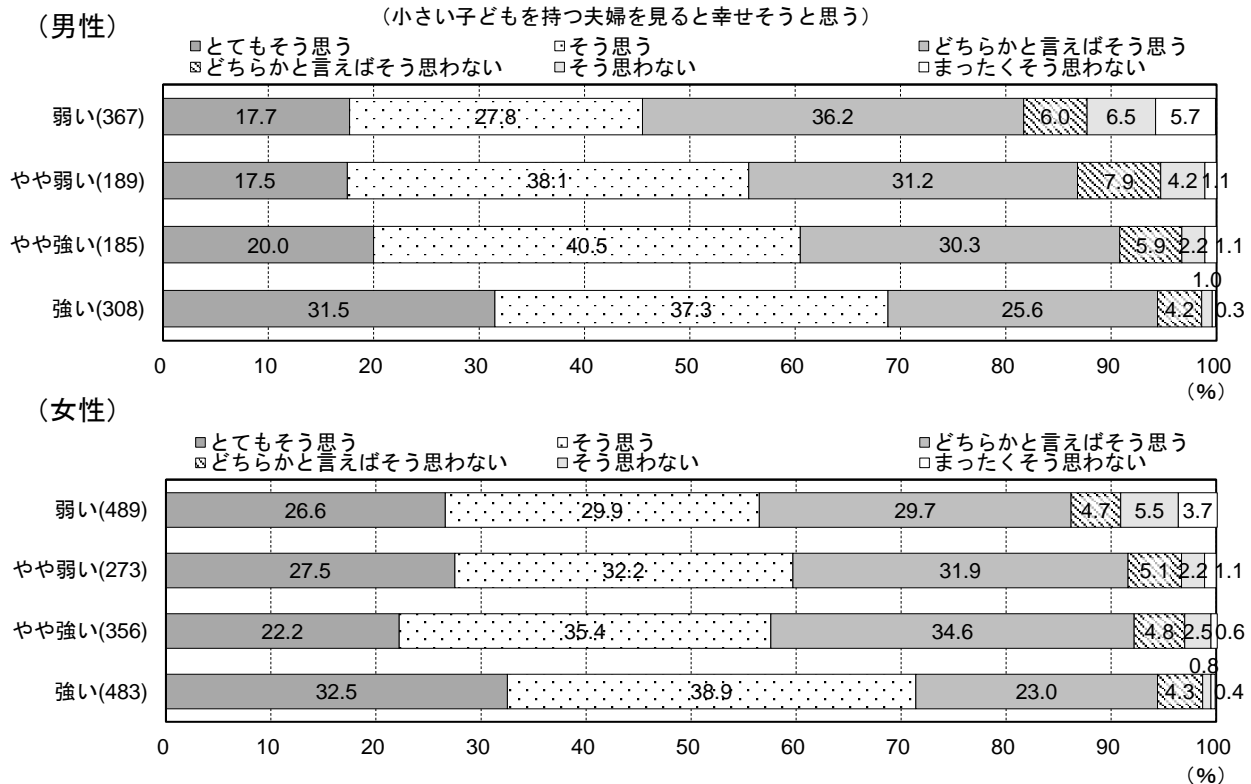
性別	社会関係性・強い				社会関係性・弱い				オッズ比
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	
男	492	66.7	33.3	2.00	556	54.7	45.3	1.21	1.66
女	838	75.1	24.9	3.02	761	70.3	29.7	2.37	1.27

ii) 子どもに対する感受性

(社会関係性は男性の子どもに対する感受性にかなり強い影響を及ぼす)

子どもに対する感受性と社会関係性との間にも緩やかな関係がみられる(図Ⅱ-59)。社会関係性が「強い」と、子どもに対する感受性の「積極的肯定」の出現率は男性で2.0倍、女性では1.4倍になる(表Ⅱ-32)。家族に対する感受性と同様、男性でかなり強い影響がみられる。

図Ⅱ-59 社会関係性の強さ別にみた子どもに対する感受性(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.1539	0.1169
P値	0.0000	0.0000

表Ⅱ-32 社会関係性の子どもに対する感受性への影響の強さ

(件、%、倍)

性別	社会関係性・強い				社会関係性・弱い				オッズ比
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	
男	493	65.7	34.3	1.92	556	48.9	51.1	0.96	2.00
女	839	65.6	34.4	1.91	762	57.6	42.4	1.36	1.40

②家族経験・子ども経験

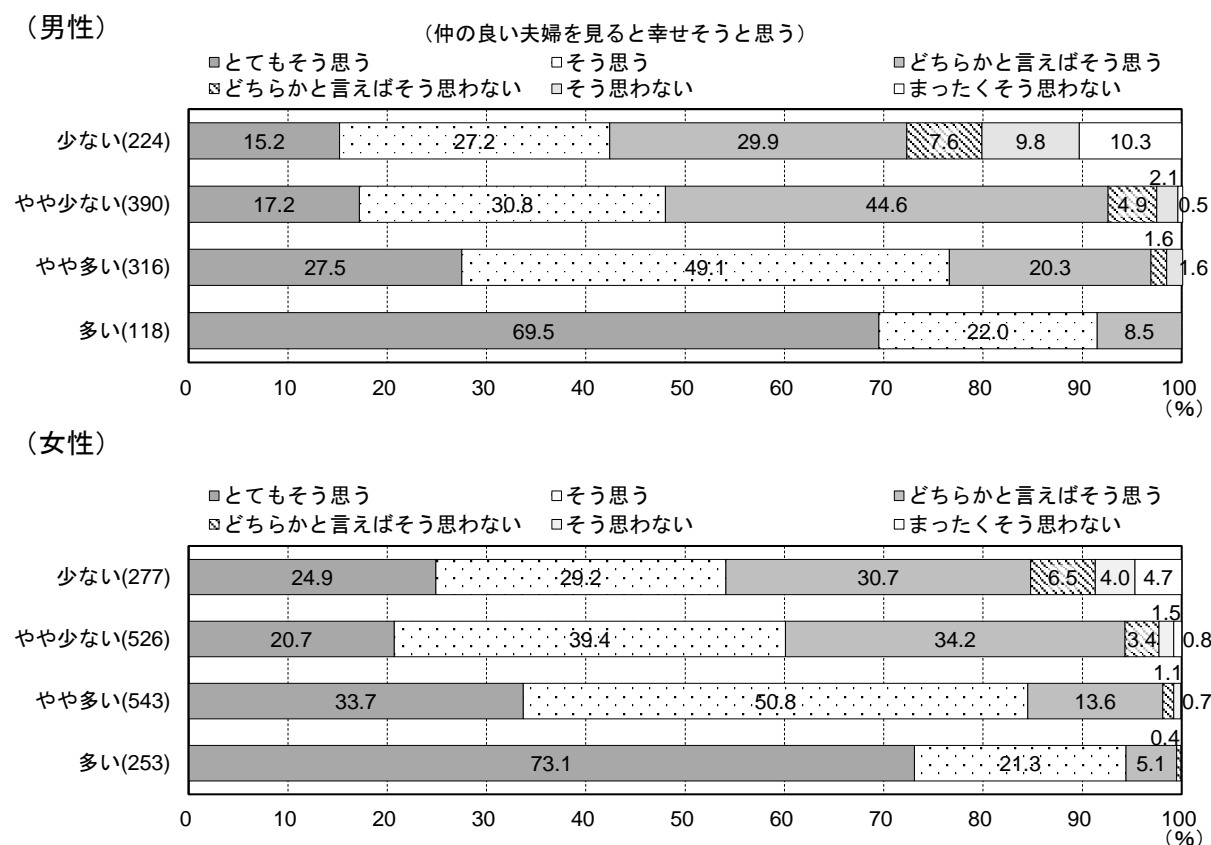
i) 家族に対する感受性

(家族経験は家族に対する感受性に極めて強い影響力を及ぼす)

「家族経験」の多さ別に家族観に対する感受性を集計すると、男女とも非常にはっきりとした相関が表れる(図Ⅱ-60)。

「家族経験」が「多い」と、「少ない」に比べて「家族に対する感受性」の「積極的肯定(とてもそう思う+そう思う)」の出現率は男性で4.9倍、女性で5.2倍になり、男女とも極めて強い影響力が表れた(表Ⅱ-33)。

図Ⅱ-60 家族経験別にみた家族に対する感受性(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.3208	0.2801
P値	0.0000	0.0000

表Ⅱ-33 家族経験の家族に対する感受性への影響の強さ

(件、%、倍)

性別	家族経験・多い				家族経験・少ない				オッズ比
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	
男	434	80.6	19.4	4.17	614	45.9	54.1	0.85	4.91
女	796	87.7	12.3	7.12	803	58.0	42.0	1.38	5.15

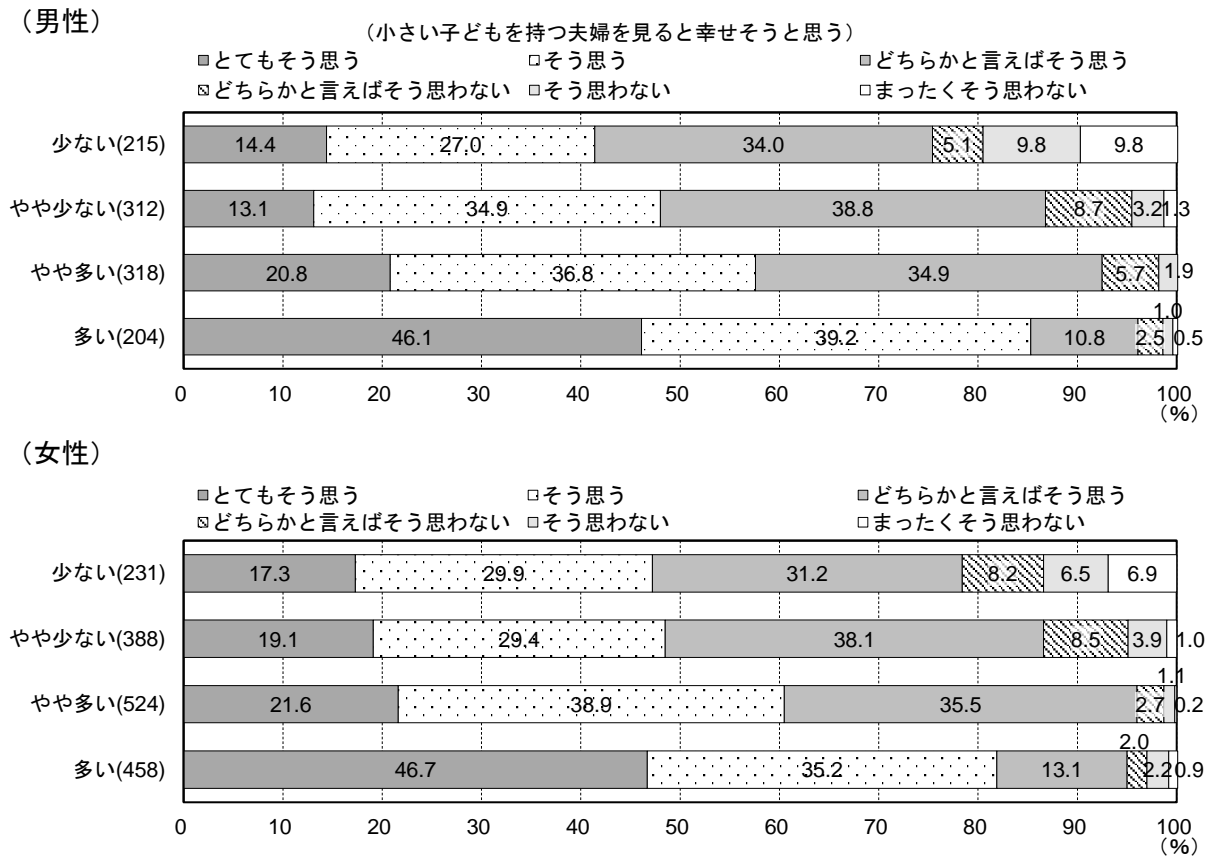
ii) 子どもに対する感受性

(子ども経験も子どもに対する感受性にかなり強い影響を及ぼす)

「子ども経験」と子どもに対する感受性との間にも、男女ともはっきりとした相関が表れる(図Ⅱ-61)。

また、「子ども経験」が「多い」と、「少ない」に比べて子どもに対する感受性の「積極的肯定」の出現率は男女とも2.6倍になり、「家族経験」が家族に対する感受性に与える影響力ほどでないものの、「子ども経験」は子どもに対する感受性にかかなり強い影響を及ぼしている(表Ⅱ-34)。

図Ⅱ-61 子ども経験別にみた子どもに対する感受性(単数)



項目	男	女
クラメールの連関係数	0.2562	0.2292
P値	0.0000	0.0000

表Ⅱ-34 子ども経験の子どもに対する感受性への影響の強さ

(件、%、倍)

性別	家族経験・多い				家族経験・少ない				オッズ比
	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	N	積極的肯定	消極的肯定・否定	オッズ	
男	522	68.4	31.6	2.16	527	45.4	54.6	0.83	2.61
女	982	70.5	29.5	2.39	619	48.0	52.0	0.92	2.59

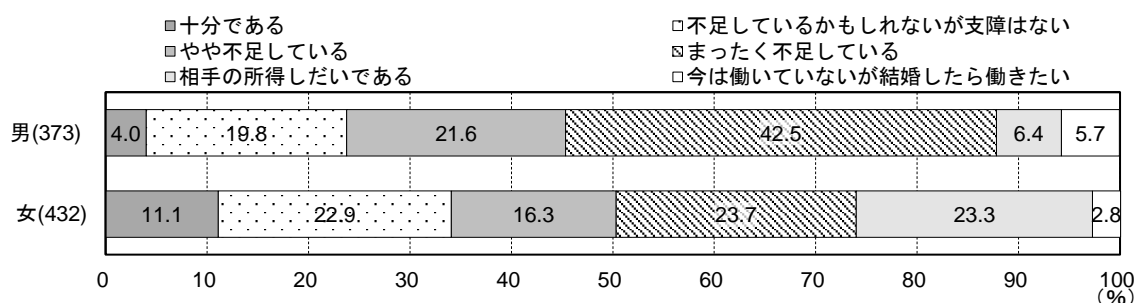
4. 所得及び雇用に関する理想と現実

(1) 結婚生活からみた自分の所得の捉え方

(結婚生活に対して所得不足を感じている独身男性は60%に上る)

所得は、結婚の意欲や結婚の実現見通しに対して強く影響していた。そこで、独身者に対して、結婚生活を送るためとしたら現在の自分の所得についてどう思うか尋ねたところ、男性では「やや不足している」「まったく不足している」の合計は64%に達した(図Ⅱ-62)。女性でも、両者の合計は40%であり、結婚に対して所得不足を感じている独身者は多い。

図Ⅱ-62 結婚からみた自分の所得の捉え方(独身者、単数)



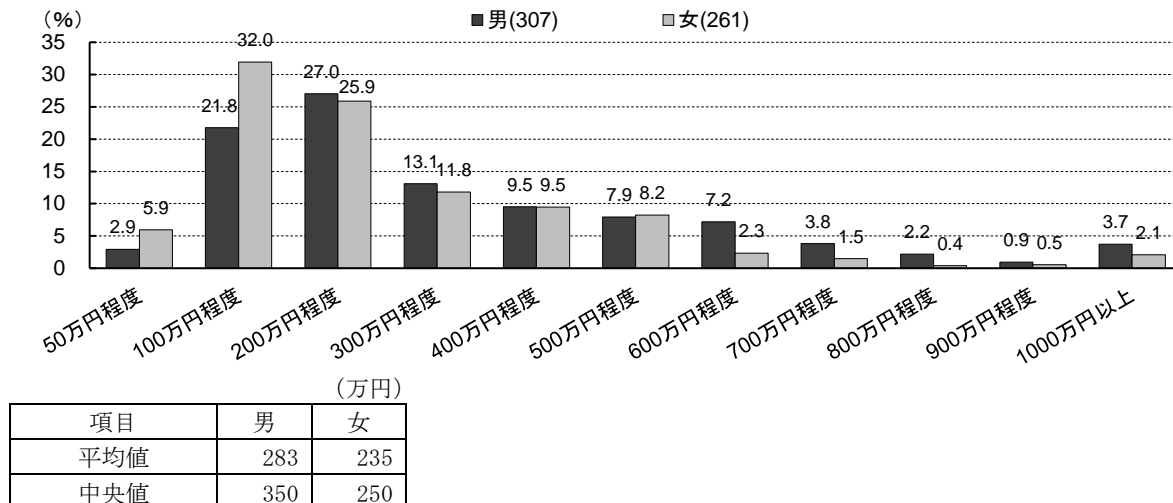
(注) 県民局別男女独身者数(20-49歳)によるウェイトバック集計である

(結婚生活のためには男性では「あと200万円が必要」が最も多い)

結婚生活のための所得が不足しているという独身者に対して、「年収で、あといくらあれば結婚生活に十分と考えるか」を把握した。

結果、男性は「200万円程度」、女性は「100万円程度」が最も多く、そこから金額が多くなるにつれて徐々に回答が少なくなり、追加所得が高い方にすそ野が長い分布となった(図Ⅱ-63)。このような分布であるため、大きな金額に対する回答の影響を受けて、平均値は男性283万円、女性235万円、中央値は男性350万円、女性250万円となり、回答が最も多い金額を上回る。

図Ⅱ-63 結婚生活のために必要な追加所得(年収)の分布
(結婚生活のための所得が不足している独身者、単数)



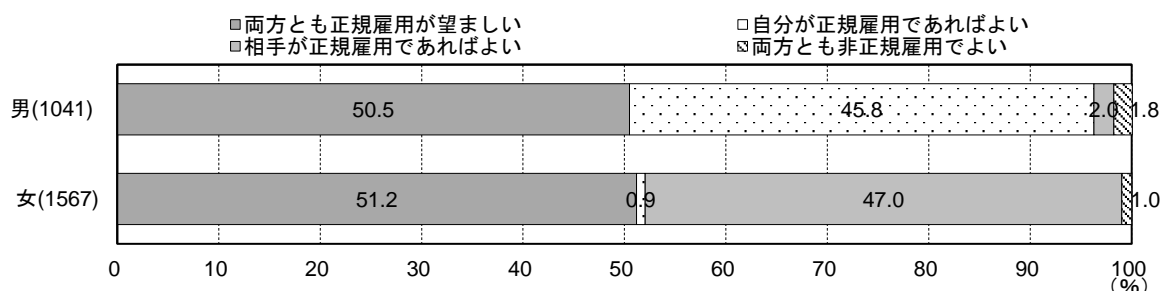
(2) 結婚生活を送る上での雇用形態の理想

(雇用形態の理想と現実が異なる者は女性に多い)

労働状態は、男女の結婚意欲や結婚の実現見通しに強い影響を与えていた。結婚生活を送る上での雇用形態の理想を尋ねると、男女とも、「(夫婦が) 両方とも正規雇用が望ましい」者が51%であった(図Ⅱ-64)。男性では残りの大半は「自分が正規雇用であればよい」であり、自分が正規雇用であることが理想の条件になっている者は96%に達する。

女性は、「相手が正規雇用であればよい」が47%を占め、男女で大きな差がみられる。

図Ⅱ-64 結婚生活を送る上での雇用形態の理想(単数)



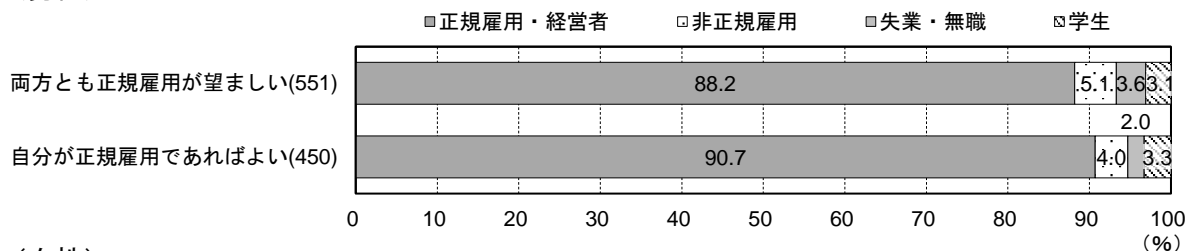
(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウェイトバック集計である

夫婦の雇用形態の理想別に本人の労働状態を集計した(図Ⅱ-65)。今回の調査では、男性の非正規雇用の割合は5.3%(詳細分析・資料編参照)であり、「両方とも正規雇用が望ましい」「自分が正規雇用であればよい」といった理想の雇用形態別にみても、理想と違って非正規雇用である者は4%~5%である。

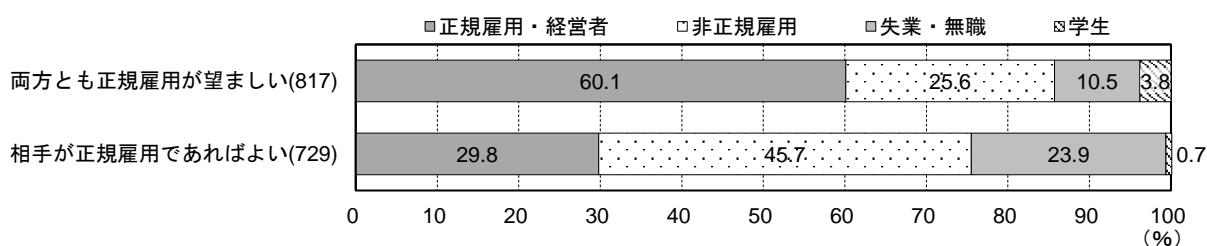
女性では、「両方とも正規雇用が望ましい」という理想であっても、現在、「非正規雇用」である者が26%、「失業・無職」は11%になっている。雇用形態の理想と現実が異なる者は女性の方が多。一方、女性は、男性に比較して、労働状態が結婚意欲や結婚見通しに対して影響を及ぼす程度は小さい(表Ⅱ-6、表Ⅱ-14)。これらのことから、女性は、労働状態の理想と現実のギャップを男性ほど厳しく捉えていないことも考えられる。

図Ⅱ-65 夫婦の雇用形態の理想別にみた本人の労働状態(単数)

(男性)



(女性)



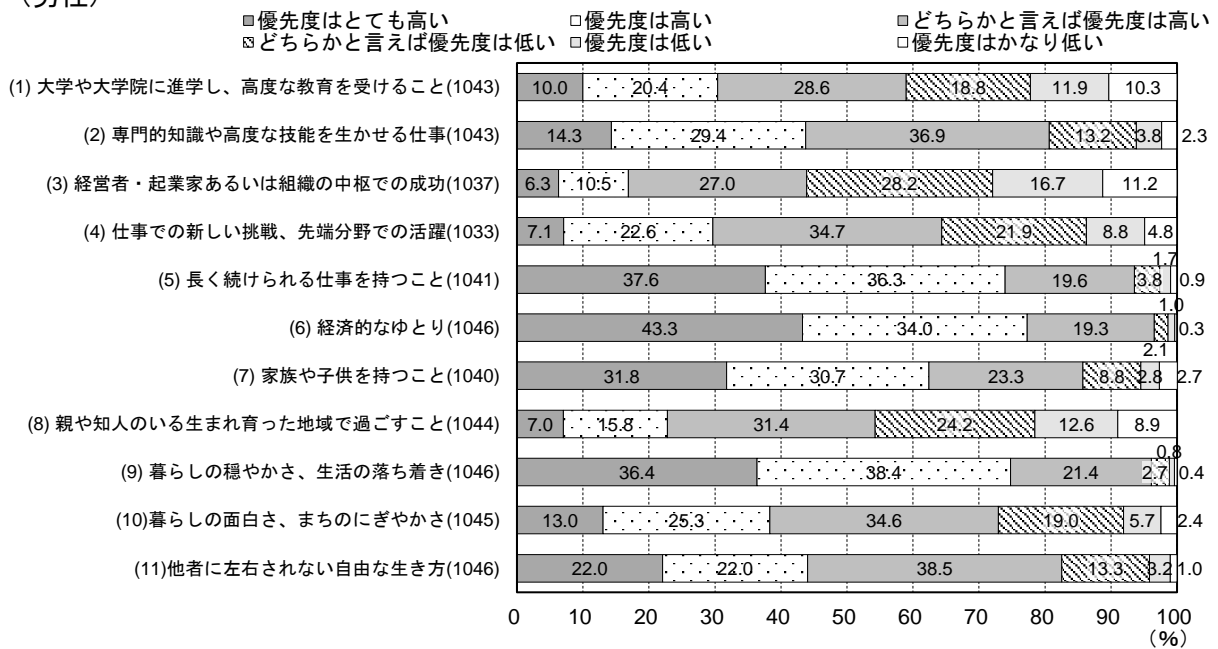
5. ライフコース

(1) ライフコースの志向性の把握

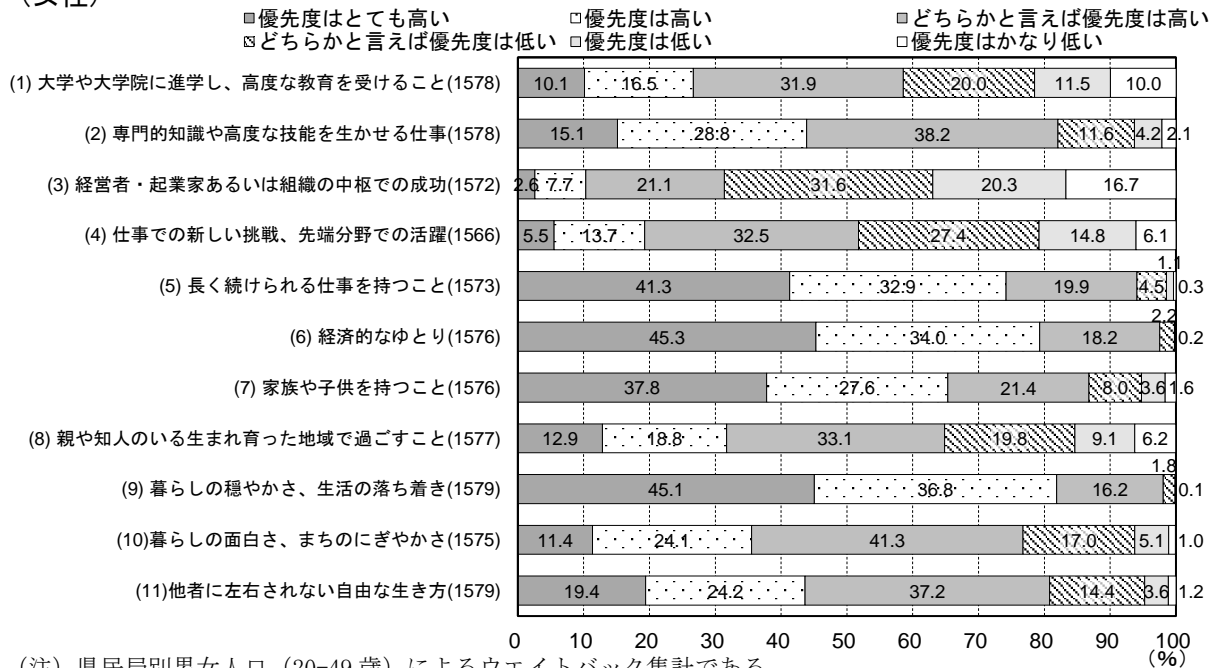
ライフコースの志向性は、女性の結婚意欲や結婚の実現見通しに対して影響を与えていた(図Ⅱ-11、図Ⅱ-21)。調査では、ライフコースの志向性は、「希望するライフコースで重視すること」を尋ねることにより把握した。質問数は11であり、個々の回答結果を図Ⅱ-66に示した。

図Ⅱ-66 希望するライフコースで重視すること(単数)

(男性)



(女性)



(注) 県民局別男女人口(20-49歳)によるウエイトバック集計である

(2) 結婚、妊娠・出産、子育てがライフコースに与える影響

(子育てがライフコースにマイナスと考える未婚女性は27%に達する)

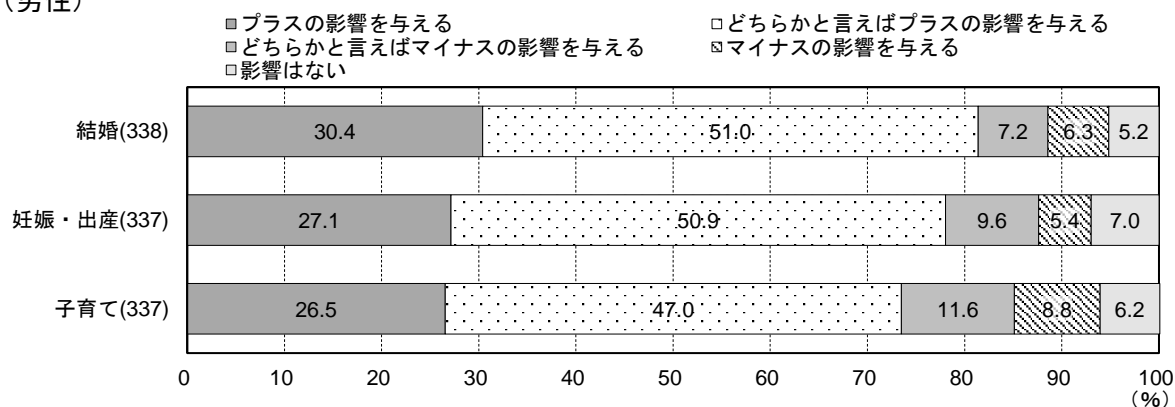
最終アウトカム分析では、ライフコースが、結婚意欲や結婚の実現見通しに与える影響について把握した。しかしながら、ライフコースと結婚や子どもを持つことは、双方の希望の実現を両立することが重要と考えられる。そこで調査では、結婚、妊娠・出産、子育てといったライフイベントが、希望するライフコースにどのような影響を与えているかを把握した。

未婚者を対象に、結婚、妊娠・出産、子育てが希望するライフコースに与える影響を集計すると、「プラスの影響を与える」「どちらかと言えばプラスの影響を与える」は、おおよそ70%から80%を占める(図Ⅱ-67)。

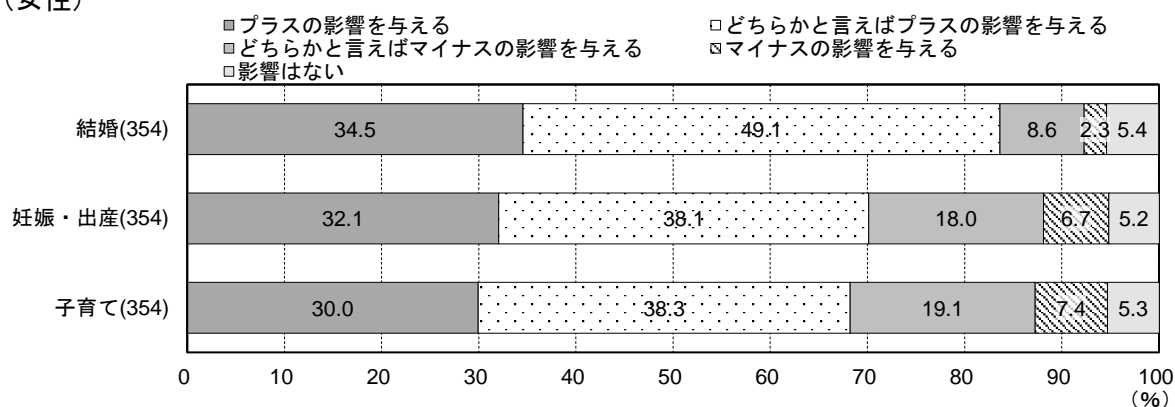
「マイナスの影響を与える」「どちらかと言えばマイナスの影響を与える」に着目すると、男女とも、結婚、妊娠・出産、子育ての順を追って「マイナス」が多くなる。結婚が「マイナス」は男性で14%、女性で11%であり、男性がやや多いものの、妊娠・出産や子育てが「マイナス」は女性の方が多い。女性では、妊娠・出産では25%、子育てでは27%が「マイナス」の回答になっている。男性においても子育てが「マイナス」は20%に上る。

図Ⅱ-67 結婚、妊娠・出産、子育てがライフコースに与える影響(未婚者、単数)

(男性)



(女性)



(注) 県民局別の男女未婚者数(20-49歳)によるウェイトバック集計である

6. 妊娠・出産に関する不安

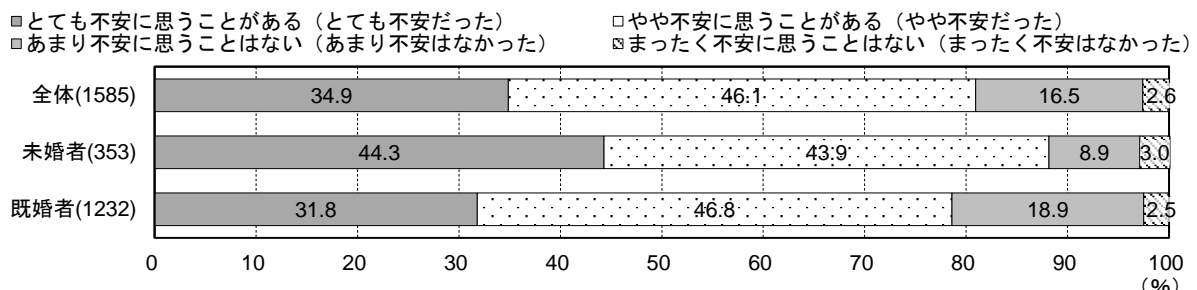
(1) 妊娠・出産に関する不安と内容

(女性の80%以上が妊娠・出産に不安を持っている)

身体への影響や医学面での妊娠・出産の不安は、未婚女性の結婚意欲や結婚の実現見通し、現実には持てる子ども数など、女性の結婚と子どもを持つことに関して広範に影響していた。

女性全体では「とても不安に思うことがある」は35%、「やや不安に思うことがある」は46%であり、81%の女性が妊娠・出産に対して何らかの不安を持っている(図Ⅱ-68)。不安感は未婚・既婚で差があり、「とても不安に思うことがある」は既婚女性では32%であるものの、未婚女性では44%に上る。

図Ⅱ-68 妊娠・出産に関する不安(女性、単数)

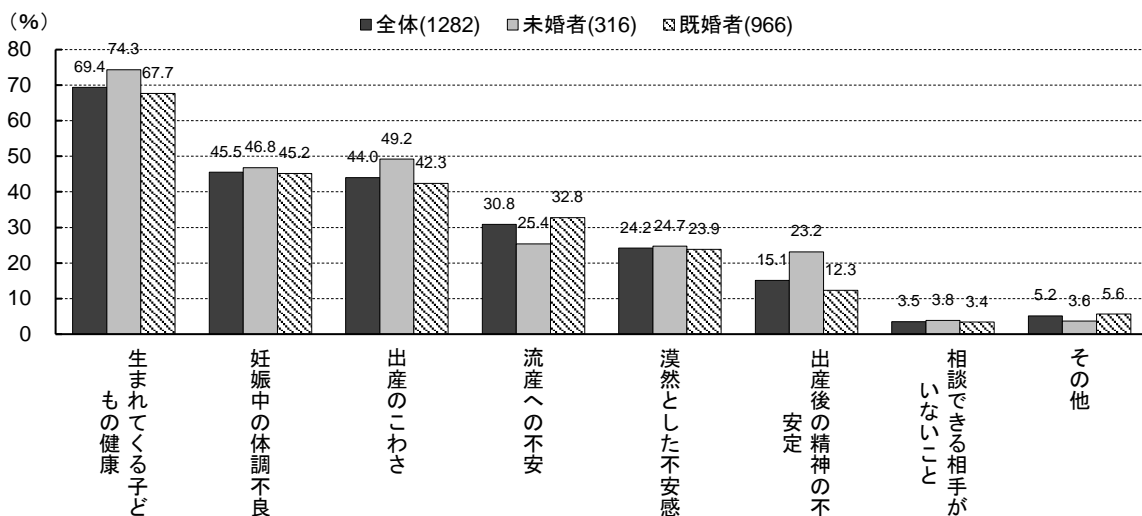


(注) それぞれ、県民局別の女性人口(20-49歳)、女性未婚者数(20-49歳)、女性既婚者数(20-49歳)によるウェイトバック集計である

不安の内容をみると、女性全体では「生まれてくる子どもの健康」が69%を占める。続いて、「妊娠中の体調不良」(46%)、「出産のこわさ」(44%)などが多い(図Ⅱ-69)。

未婚者もおおよそ同様の傾向であるものの、「出産のこわさ」(49%)、「出産後の精神的不安定」(23%)などは既婚者と比べて回答が多く、未婚者の特徴になっている。

図Ⅱ-69 妊娠・出産について不安に思う内容(不安がある女性、複数)



(注) それぞれ、県民局別の女性人口(20-49歳)、女性未婚者数(20-49歳)、女性既婚者数(20-49歳)によるウェイトバック集計である

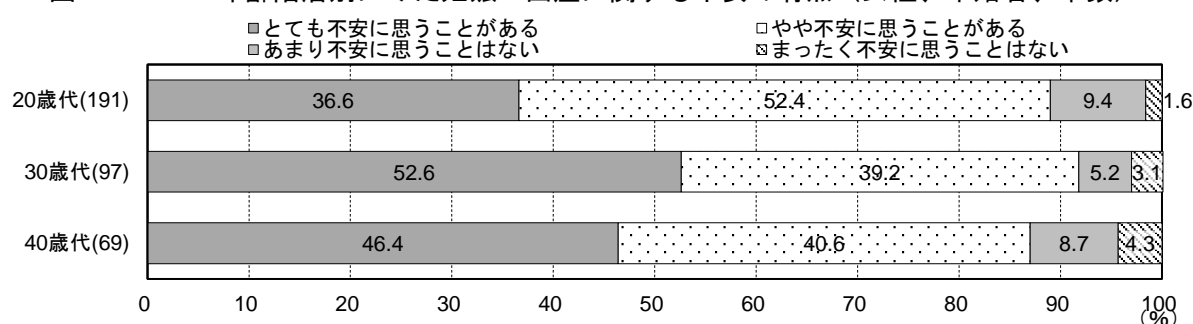
(2) 妊娠・出産に関する不安に影響を及ぼす要因

①年齢

(未婚女性では年齢とともに妊娠・出産に関して不安を持つ者が増える)

未婚女性を対象にして年齢階層別に不安感を集計すると、20歳代の「とても不安に思うことがある」が37%であるのに対して、30歳代は53%、40歳代は46%と多くなっている(図Ⅱ-70)。これは、年齢が高くなることにより妊娠・出産に伴うリスクが高まることから、結婚前における不安感として表れていると考えられる。

図Ⅱ-70 年齢階層別にみた妊娠・出産に関する不安の有無(女性、未婚者、単数)



クラメールの連関係数	0.1201
P値	0.1124

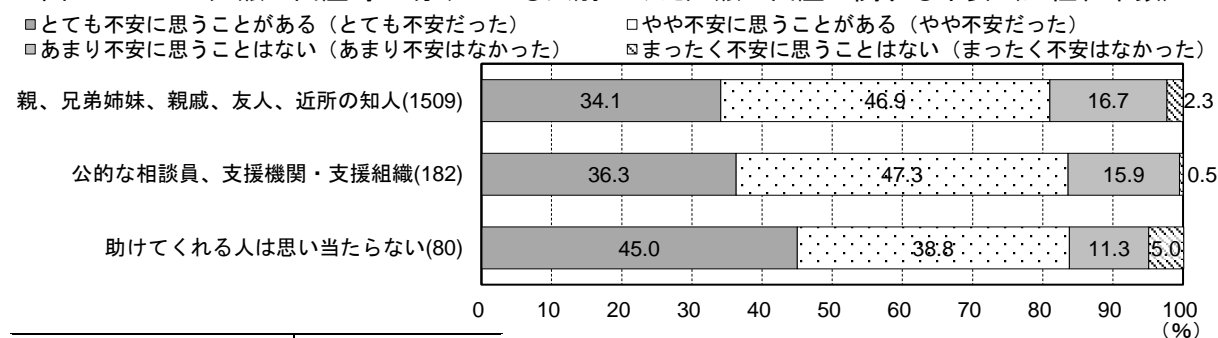
②妊娠・出産時に助けてくれる人

(助けてくれる人がいない者では不安感が強い者が多い)

調査では、妊娠・出産時に相談や生活面で助けてくれる人の有無を尋ねた。「親、兄弟姉妹、親戚、友人、近所の知人」や「公的な相談員、支援機関・支援組織」が助けてくれる人がほとんどであるが、「助けてくれる人は思い当たらない」がいくらか存在している。

そうした「助けてくれる人は思い当たらない」者では、妊娠・出産に関して「とても不安に思うことがある」は45%に上り、他に比べて10ポイント程度多くなっている(図Ⅱ-71)。

図Ⅱ-71 妊娠・出産時に助けている人別にみた妊娠・出産に関する不安(女性、単数)



クラメールの連関係数	0.1201
P値	0.1124